

嵐のあとに

久野量一

『ウエスト・サイド物語』は日本でもよく知られ、さまざまな形で上演が続いている。元はブロードウェイ・ミュージカルだが、誰でもどこかで聞いたことがあるほど有名になったのは、一九六一年製作の映画版によるものだろう。ジョージ・チャキリスは映画では主役に抜擢された。ジャーニー喜多川がこの映画に感動し、美少年アイドルを着想したというのは、本当だとすれば過ぎた話だ。ノンフィクション風にいえば、一九六〇年代初頭のあの雨の日、彼がこの映画を見なければ、日本の芸能界はまったく違ったものになっていただろう、というわけである。もつともこの映画がNYに移住したプエルト・リコ系の若者たちに向けられる、白人のヘイトを扱っていることを知っている人はあまり多くない。

ま、それはともかく、映画にはこんな歌が出てくる。
プエルト・リコ(中略)／海に沈めてやる／いつもハ

する形で進んでいた、とんでもない米国起業家優遇政策が次々に明かされていく。ハリケーンののち、プエルト・リコ人の離散が起き、島は半ば空っぽになる。乗り込んでくるのは、新たな金融ゲームを享受しようという「プエルトピア人」たちで、彼らはプエルト・リコでスペイン語が話されていることさえも知らない。その一方で、プエルト・リコ人による共同体作りの夢、相互扶助に根ざした楽園実現に向けての運動が、再生可能エネルギーや農業分野などで進行している。クラインはもちろん後者が希求する「異なる世界」「異なる未来」に夢を見つけようとする。

個人的な話で言うと、一九九三年にハバナを襲ったハリケーンのことかどうしても忘れられない。三月という時期外れにやってきたこのハリケーンは「世紀の嵐」と呼ばれている。その直前までハバナにいたばかりは偶然にも何の影響も受けずに帰ってきた。記憶に間違いがなければ、ハバナを発つとき、嵐の影響を避けるために通常とは逆方向に離陸すると機内アナウンスがあった。帰国してみると、ハバナは浸水や建物の倒壊など大きな被害を受けた。「キネカ錦糸町」のような、九〇年代にはラテンアメリカ映画祭をやっていた映画館では支援の募金箱が置かれていた。この年がキューバにとってのゼロ年であるとキューバの作家によって記されるのはおよそ二十年後のことである(カル

リケーンが吹き荒れて／人口ばかり増え続ける／金が支配し／日が降り注ぐ／人々はイライラ／私はマンハッタンが好き(映画版字幕翻訳・菊地浩司による)

作詞家はプエルト・リコのことを知らずに書いたそうだが、やはりカリブ海といえばハリケーンなのだろう。プエルト・リコは米西戦争直後に大きなハリケーンに襲われ、職を失った人々はハワイに渡った経験もある。日本にも通じることだが、ハリケーンというのは、そこに居住する人々のみならず、避難や移住など、気象学的なその雨風の大きさどころではない影響を及ぼす自然災害なのだ。

近年では二〇一七年にプエルト・リコはハリケーン「マリア」を経験した。このハリケーンのも後のことを、ナオミ・クラインが島を訪れて書いたルポが『楽園をめぐる闘い』である。この本では、ハリケーン災害に立ち直れないところに持ち込まれる災害資本主義と、実はそれに先行

ラ・スアレス「ハバナ零年」。

『楽園をめぐる闘い』でクラインは以下のように言う。災害を被ったのちの共同体作りの運動は資本の速度と競争しなくてはならない。それは過酷なことである、と。「問題は、資本と違い、運動の動きは遅い傾向にあるということだ。これは、民主主義を深め、普通の人々に自分たちの目標を定めさせ、歴史の手綱を掴ませることを目的とする運動については、なおのこと当てはまるのである」(二一五頁)。共同体を作る運動、歴史と言うものを自分の手で掴むための運動、これらには時間がかかる。ものすごく長い時間が。文学もまたこうした運動の一つであると思うが、こと速度で言ったら最も遅い分野かもしれない。そもそも、なにかが書きはじめられるまでには、長い時間がかかる。それが出版され、読まれ、その作品が人々によって語られるためには、さらにさらに長い時間がかかる。だからそういう運動がはじめられたら、それは幸運なことと考えたい。

く・りょういち 総合国際学研究院准教授 ラテンアメリカ文学
文献案内

DVDロバート・ワイズ『ウエスト・サイド物語』20世紀フォックス・

ホーム・エンターテイメント・ジャパン、二〇一八年

ナオミ・クライン『楽園をめぐる闘い——災害資本主義に立ち向かうプエルトリコ』星野真志訳、月曜社、二〇一九年

カルラ・スアレス『ハバナ零年』久野量一訳、共和国、二〇一九年